様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：２５４０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２５９３

研究課題名（和文）漢代宴席文芸と建安文学との継承関係に関わる研究

研究課題名（英文）A Study on the Inheritance Relation from Banquet Literature of Han Dynasty to Jian'an Literature

研究代表者
柳川　順子（Yanagawa, Junko）

県立広島大学・人間文化学部・教授

研究者番号：６０２１０２９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　西暦３世紀初め、曹操（後の魏の武帝）の下に形成された建安文壇は、いくつかの新しい文学的潮流を創出した。本研究は、その中でも特に歴史故事を詠じた五言詩（詠史詩）に焦点を絞り、この新ジャンルが成立した経緯を、それ以前の漢代宴席文芸との継承関係という視点から明らかにしたものである。
　建安文人たちの活動の場は宴席である。それに先立つ漢代の宴席では、五言詩歌が生成展開する一方、歴史故事をテーマとする語り物文芸も盛行していた。そこで、宴席という場を介して、詩歌と語り物とが出会って誕生したのが詠史詩であり、それを知識人の文学として洗練したのが建安文壇である。以上のことを論証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　中国中世の初めに位置する建安文学は、後世の文学に大きな影響を及ぼしたことで広く知られる一方、先行する漢代文学との関係性は多く未解明であった。これに対して本研究は、文学活動の場というものに着目し、建安文学の本質を、長らく伏流してきた漢代宴席文芸を発展的に継承し、知識人の文学に昇華させたものと捉えた点で画期的である。これにより、建安文学の歴史的位置は定まったと言えるだろう。一例として、詠史詩という新ジャンルの成立経緯を、詩歌と語り物という異なる分野の文芸が、宴席という場を介して出会って誕生したものと解明し得たことは、上記の視座が有効であることを示している。

研究成果の概要（英文）：The Jian’an literary circle, formed under the rule of Cao Cao (who later became Wu-di of Wei), gave birth to numerous literary trends in the beginning of the 3rd Century AD. This study has especially focused on five-syllable poems (history-praising poems), which were literary tributes to historical tales or events, clarifying its development of this new genre by examining its inheritance relationship with preceding banquet literature of the Han dynasty. Banquets were a common stage for Jian’an literary writers. However, in banquets of the preceding Han Dynasty, while five-syllable poems were actually created, one of the most popular themes for narrative literature at the time was praise for historical events. It was through such banquets that brought poetry and narrative literature together to form what is known as “history-praising poems” and it was later refined by the Jian’an literary circle into a literary genre for knowledgeable men. The above is the finding of this study.

研究分野：中国古典文学

キーワード：建安文壇　宴席　詠史詩　五言詩　歴史故事　語り物　楽府詩

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）建安文学へのアプローチ

西暦 3 世紀初頭、中国中世の冒頭に位置する建安文壇は、中国文学史上ひとつの画期をなす文人集団である。まず、五言詩という詩型が、この文壇に至って始めて、知識人の思いを表出するための器たり得る文体として確立したこと。そして、特にこの五言詩というジャンルの作品の中に、唯一無二の個人に発する、対自的な思いの表出が認められることである。近代的な意味での文学に極めて近いこうしたモチーフは、先行する漢代の文学においては希薄なものであった。

この建安文学の画期性は、近代以降、多くの先人によって指摘されてきたところではある。だが、その実態の究明は、未だ明確な像を結んでいるとは言いがたい。なぜか。それは、建安文学と、先行する漢代文学との関係が不分明だからである。漢代文学の代表的ジャンルといえば、『楚辞』の流れを汲む辞賦であり、『詩経』と同じ詩型を取る四言詩が真っ先に想起されようが、こうした正統派文学の系譜をたどっても、建安文学が持つ新しさの由来は見えてこない。建安文学の直接的な源流は、恐らくはこちらではないのだろう。先んじる時代との関係が明瞭でないまま、ある文化的現象の画期性を論ずることは不可能である。

このような現状に対して、報告者は次のような仮説を立てるに至った。すなわち、建安文学は、漢代の宴席で行われていた様々な文芸との間に密接な継承関係を持っており、両者の関係性を精査することによって、その歴史的位置を明らかにすることができるのではないかという見通しである。建安文学を、前代の正統派文学から系譜付けるのではなく、漢代の宴席で盛行していた遊戯的な文芸とのつながりという観点から捉えようとする着想*1 は、報告者が継続的に取り組んできた以下の研究の成果から導き出されたものである。

（２）創作活動の場という視点

建安文学の歴史的位置を見定める上では、創作活動が行われた場というものに着目することが有効である。このような認識に至った理由を、以下、前漢時代まで時を遡り、一見無関係にも思える問題意識を迂回しつつ説明したい。

建安の五言詩には、たとえば、男性知識人が女性に成り代わって詠ずる、いわゆる閨怨詩が多く含まれている。これはいったいどういうわけか。長い五言詩史上、なぜかくも早い段階で男性が女性に成り代わる必然性があったのか。この不可思議の一例は、次のような考察経路に由って解き明かすことが可能である。

まず、古詩と総称される、漢代詠み人知らずの五言詩群がある。この数十首の作品群は、これまで後漢時代後期に成立したと見る説が有力であったが、この中に特別な一群（陸機「擬古詩」の模擬対象となった十四首、あるいは枚乗「雑詩」と伝えられていた作品群とも説明される）の存在することを梃子として腑分けした結果、この別格の古詩群が成立したのは後漢時代の前期であり、更にその中でも最も古い一群は、前漢時代の後期、後宮の女性たちの間で誕生したものであると推定することができた。これらの原初的古詩はすべて、女性の立場から、男女の離別の悲しみをテーマに詠ずるものである。必ずしも詩の内容によって分類したわけではないにも関わらず、この最も古層に属する古詩群は一様に、いかにも後宮の女性たちの好尚に合致するものが抽出される結果となった*2。

この原初的古詩群は、宴席という場を介して、前漢の後宮周辺からその外へと広く波及し、様々なバリエーションを加えながら生成展開を繰り広げていった。かくして、後漢時代の初め頃には、前述の特別な古詩諸篇が出揃ったと推定される。これらの詩篇は間もなく、ひとつのまとまりを成す作品群に編成されて格段に大きな伝播力を獲得し、後漢時代を通して、広範な知識人層に浸透していったことが跡付けられる*3。

さて、後漢末の建安年間、魏王朝の創始者、曹操の下に形成された建安文壇には、文人たちが宴席を舞台に五言詩を盛んに競作するという場面がしばしば認められる。こうしてみると、建安詩と古詩とは、その創作の場が宴席であるという点において共通していると言えよう。建安の五言詩を、漢代の宴席で生成展開してきた古詩の延長線上に位置付けるならば、その作者たちが、古詩に特徴的な辞句をふんだんに織り込んで五言詩を競作した必然性も見えてくるし、更に、古詩が本来的に持っていた女性性を纏いつつ、遊戯的に閨怨詩を作ってみせた不可思議もおのずから氷解するだろう*4。

創作活動の場という視点から見るならば、建安の五言詩は、漢代の宴席で生成展開してきた古詩の直系だと言える。建安詩と古詩との近似性は、同時代の産物であるが故に生じたものではなく、歴史的な継承関係の上に生じたものであると報告者は考える。そして、建安文壇に至って突如躍り出たかに見える五言詩ではあるが、それは、遊戯的な宴席文芸として長らく雌伏の状態にあった古詩が、時にめぐり合い、文学の表舞台に登場することとなったものだと捉えるのが妥当だろう。

（３）漢代の宴席で繰り広げられた諸文芸

漢代の宴席では、前述の古詩以外にも様々な文芸が繰り広げられていた。周知のところでは、民間歌謡に発祥するとされる詠み人知らずの楽府詩（古楽府）がある。また、『楚辞』九歌と同じ詩型を取る九歌型歌謡も、音楽を伴って実際に上演されていたと推定されている*5。更に、この九歌型歌謡を含めて記述する文献には、それが身振り手振りを伴って演じられていたことを推測させる表現上の形跡が認められる*6。

ジャンルを異にするこれらの文芸は、漢代、宴席という場を介して、相互に乗り入れる新たな作品を生み出していった。たとえば、古詩特有の表現を含む古楽府*7 また、九歌型歌謡を伴って演じられていたと推定される李陵・蘇武の故事を踏まえつつ、古詩に特徴的な表現を織り込みつつ詠じられる五言詩（いわゆる蘇李詩）*8 などである。

これらの漢代宴席文芸に加えて、歴史故事を題材とする語り物文芸も、当時の宴席を彩る娯楽のひとつとして行われていたと推定できる。報告者がかつて行ったこの研究（「画像石を媒介とした漢代語り物文芸の復元に関わる研究」課題番号 25370402）について、その概略を示せば以下のとおりである。まず、画像石に見える歴史故事の図像は、しばしば宴席の様子を活写したそれに隣接して現れ、時にはその図像内に楽人や舞人の姿が認められる。また、画像石に描かれた歴史故事が文献資料に見える場合、それが語られていたことを推測させる特徴的な文体（会話体の多様、同語・同文の反復、身振りのあり様を示す記述など）によって記述されていることが多い。更に、こうした歴史故事は、後世の白話文学（変文や戯曲など）に取り上げられているケースが少なくない。以上のことから、画像石に描かれた歴史故事は、当時の宴席で上演されていた演劇を活写したもの、あるいは宴席で語られる物語世界を視覚的に再現してみせたものと推し測られる*9。

漢代の宴席では、このように多彩な文芸が盛行していた。これらを総称する漢代宴席文芸という語は、報告者独自の括り方によるものである。様々な言語芸術を、ジャンルで仕切るのではなく、それらが行われた場の同一性に着目してひとつのものとしたのである。これにより、従来その発生経緯が不分明であったいくつかの新しい文化事象について、その歴史的必然性が見えてくると考えた。

＊1 鈴木修次『漢魏詩の研究』（大修館書店、1967 年）は、報告者と同じく、建安詩を漢代詩歌の延長線上に位置付けるが、古詩・古楽府の歴史的展開をどう捉えるかという点で分岐する。
＊2 柳川順子『漢代五言詩歌史の研究』（創文社、2013 年）第一章、第二章を参照されたい。もととなった初出論文については省略する。以下同様。
＊3 柳川前掲書の第三章、第四章。
＊4 柳川前掲書の第六章。
＊5 藤野岩友『増補巫系文学論』（大学書房、1969 年）168―172 頁を参照。
＊6 柳川前掲書の第二章 109―114 頁。
＊7 柳川前掲書の第五章第三節。
＊8 柳川前掲書の第四章第四節。
＊9 柳川順子「漢代画像石と語り物文芸」（『中国文学論集』第 43 号、2014 年）。

２．研究の目的

前項「研究開始当初の背景」で示した見通しにもとづいて、魏の建安文学と漢代宴席文芸との継承関係を明らかにし、建安文学の歴史的位置とその画期性を、前代の文化的動向との繋がりにおいて捉えることを目的とした研究である。

漢代宴席文芸のうち、古詩や蘇李詩が建安の五言詩に昇華した経緯については、前項で述べたとおり報告者は既に論究したことがあるが、今回の研究で明らかにしようとしたのは、漢代の宴席で行われていたと推定された語り物文芸や演劇と、同様な場で創作活動が行われていたと見られる建安文学との継承関係である。特に、歴史故事を詠じた五言詩（詠史詩）や、歴史故事を織り交ぜて歌う楽府詩に焦点を絞り、その生成経緯の究明を試みた。また、語り物のような宴席文芸が、建安詩人たちの教養の一角を成していた可能性についても検討した。

３．研究の方法

（１）五言詠史詩に関わる検討方法

逯欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』（中華書局、1983 年）により、建安期を含む漢魏六朝時代の現存する全ての詩から、詠史詩と思しい作品をピックアップし、そこに詠じられた歴史故事と、漢代画像石に見えるそれとの対応関係を精査した。建安文学に限定せず、漢代から六朝期末にまで調査対象を広げたのは、現存する作品数の少なさから、建安期のみを検討対象としていては妥当な見地にたどり着けない可能性が高いこと、建安文壇には、続く六朝期に盛行する文学

サロンの原型と見なせる要素が認められ、両者は基本的に同質の文人集団であると見なせること、という二つの理由による。
　続いて、上記の調査結果を土台として、詠史詩の生成と漢代語り物文芸との関連性に対する検討を行った。五言詩と語り物文芸とは、ともに漢代の宴席を舞台に展開して建安に至るとの見通しを立てていたが、この仮説の妥当性を検証しつつ、漢代における五言詠史詩の生成経緯、及び建安文壇におけるその新たな展開状況を明らかにしていった。

（２）歴史故事を詠じた楽府詩に関わる検討方法

　前掲『先秦漢魏晋南北朝詩』、及び北宋・郭茂倩『楽府詩集』により、曹魏王朝の皇族（曹操・曹丕・曹植・曹叡）による「相和」「清商三調」歌辞を中心に、漢代から西晋時代までの現存する全ての楽府詩の中から、歴史故事を詠じた作品をピックアップし、そこに歌われた内容と、漢代画像石に見えるそれとの対応関係を精査した。上記の詠史詩とは違って、考察対象の下限を西晋末とした理由は、西晋王朝の滅亡に伴い、漢魏の楽府詩が持っていた、生きた歌曲としての命脈がここで一旦失われ、以降の楽府詩は、目下の考察対象である建安のそれとは異質なものとなっていったからである。
　更に、上記の調査結果を土台として、楽府詩に歴史故事が多く詠み込まれる理由を明らかにしながら、あわせて当時の知識人における語り物文芸の浸透状況を見ていった。

４．研究成果

（１）五言詠史詩の生成経緯

　元来が抒情詩である五言詩に、叙事的要素の強い歴史故事がなぜ流入することになったのか、その歴史的必然性を明らかにした。まず、五言詠史詩の、遡り得る最も早い作品群である班固の詠史詩について、その題材となった故事の来源を探究したところ、延陵季子の宝剣の故事は、宴席における語り物文芸として盛行しており、孝女緹縈や秋胡夫妻の故事は、宮殿や邸宅の壁面を彩りつつ、宴席などの娯楽的空間で絵解き物語として演じられていたと見られることが跡付けられた。これに基づき、五言詠史詩というジャンルは、長らく宴席を舞台に展開してきた五言詩が、同じ宴席という場で楽しまれていた、歴史故事を題材とする語り物文芸や絵解き物語と出会って誕生したものであると結論付けた。

　ついで、建安文壇で競作された詠史詩について検討した。まず、刺客荊軻の故事という同一テーマで作られた、複数の詩人の五言詩が伝存していることを示して、詠史詩というジャンルは元来、社交的な場で繰り広げられる遊戯性の強い詩歌であったと見られることを指摘した。荊軻の物語は、宴席で身振りを伴って演じられる、あるいは語られる娯楽文芸であったと既に推定されており、こうした物語が五言詩と出会うのは自然の趨勢であったと言えよう。また、六朝時代末の梁・陳の五言詩作品に、宴席における競作であることを示唆する「賦得荊軻詩」といった詩題が見えることからも、詠史詩が持つ本来的な性格が浮かび上がってくる。
　更に、君主の死に殉じた三人の良臣を詠ずる詠史詩の競作を取り上げて、建安文壇が切り開いた詠史詩の新たな局面にも光を当てた。こうした詩題は、君臣の信頼関係を問うことになりかねない過酷なものであって、前述の荊軻の故事を題材とするような、遊戯的な詠史詩とは異質である。とはいえ、曹魏政権下の宴席で、こうした話題の談論がしばしば行われていたことからすれば、このいわゆる「三良詩」もまた、他の詠史詩と同様に、宴という場があってこそ誕生し得たものだと言える。
　以上は、下記の雑誌論文①で論じた内容である。

（２）楽府詩に歴史故事が詠じられる理由

　画像石に頻見する「二桃殺三士」を詠じた漢代の古楽府「梁甫吟」、及び「鴻門の会」を詠じた西晋の傅玄「惟漢行」を通して、楽府詩に多く歴史故事が登場する理由を、以下のとおり明らかにした。民間歌謡に出自を持つ楽府詩は、遅くとも後漢時代には宴席文芸のひとつとして盛行しており、曹魏王朝に至っては宮廷歌曲に取り上げられるものも出た。他方、歴史故事にもとづく語り物文芸もまた、同様な場で楽しまれていた。場を共有する二つのジャンルが出会って新たな作品を生み出したという経緯は、先に述べた詠史詩の場合と同様である。
　以上は、下記の学会発表①で論じた内容の一部である。

（３）建安詩人における歴史故事の摂取

　建安詩人を代表する曹植の、歴史故事に言及する楽府詩の中に、語り物に由来すると思われる辞句が交えられていることを指摘した。中でも、「当牆欲高行」にいう「讒言三至、慈母不親」は、曹参母子の信頼関係を物語る逸話として、現存する歴史書にはこのような文面では見えていない一方、山東嘉祥県武梁祠西壁画像石に刻まれた「讒言三至、慈母投杼」に酷似していることで注目される。こうした事例は、建安文人たちの教養が、書物から得られた知識のみで成り立っているのではなく、語り物や演劇といった、通俗的な口承文芸から吸収したものを多分

に含んでいる可能性を示唆している。
　以上は、下記の学会発表①で論じた内容の一部である。

（４）建安文学をめぐる歴史的事実の把握

　建安文壇の歴史的位置を明らかにするための基盤として、『三国志』裴松之注に引く『魏略』の史料的価値の高さを明らかにした。魚豢による私撰の歴史書『魏略』は、官撰の国史と同等の原資料に拠りつつ、現王朝への忌憚なき記述という点では、官撰の『魏書』とは袂を分かつ。建安文学を成立させた時代背景を知る上で、第一級の史料であると言える。
　このことは、下記の図書①所収の論文「『魏略』の撰者、魚豢の思想」で論じた。また、学会発表①でもその成果の一部を援用した。

（５）インターネット上における研究成果の公開

　研究成果を広く社会に還元するため、下記のとおりホームページを作成し、本研究の基盤となったこれまでの研究成果を中心とするコンテンツを公開した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１件）
①　柳川順子、五言詠史詩の生成経緯、六朝学術学会報、査読有、第 18 集、2017 年、pp.1―18

〔学会発表〕（計　１件）
①　柳川順子、魏晋楽府詩与説唱芸術之関係初探（報告書有）、楽府学会第 3 回年会・第 6 回楽府詩歌国際学術研討会（於徐州師範大学）、2017 年 10 月 21 日

〔図書〕（計　１件）
①　沈伯俊　大上正美　堀池信夫　石井仁　小林春樹　牧角悦子　和久希　高橋康治　柳川順子　渡邉義浩　大村和人　矢田博士　中川諭　仙石知子　伊藤晋太郎　長尾直茂、汲古書院、狩野直禎先生米寿記念三国志論集、2016 年、総頁数 448（うち pp.223―242）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）
○取得状況（計　０件）

〔その他〕
ホームページ等　http://yanagawa2019.sakura.ne.jp/

６．研究組織
(1)研究分担者　なし
(2)研究協力者　なし